Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

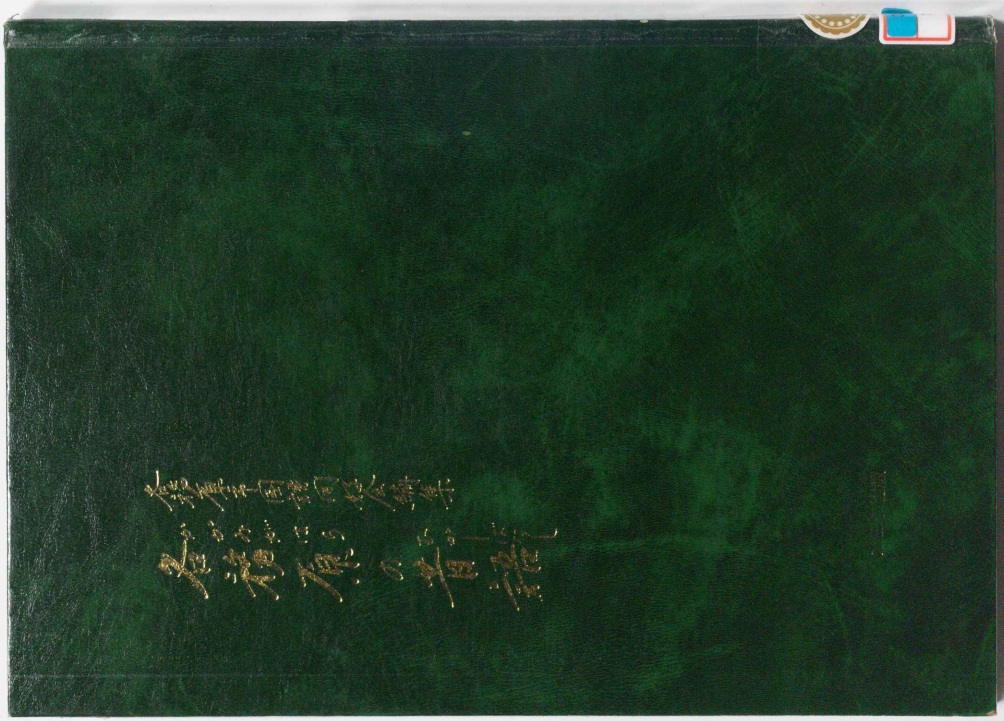
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



各務原市国語同好会編集

各務原（かかみがはら）の昔語（むかしばなし）

序

このごろは各地で民話とか伝説の掘りだしが盛んになりました。近代化、都市化する激動の社会情勢は、人間の心にゆとりとうるおいを無くしていきつつあります。

わたくしどもが子どものころは、父や母からとこの中で昔話をよくきいたものでした。今の若い親たちはこうした口頭伝承を余りやらないようです。民話は、庶民の泥くさい素朴な生活の中から生まれた願いのようなものが底に流れています。それはまた民衆が生みだしたその土地の血や汗がしみこんでいて読むたびきくたびに心温まる思いがいたします。

各務原にも古い伝統をもつ集落がたくさんあります。これらの土地々々には、素朴な言い伝えによる話がいくつか残っている筈です。だがこうした話は、断片的に知っている程度で、多数の民衆には確かな物語として定着していません。このまま放置すれば自然消滅の運命をたどるばかりです。

本市教育委員会の河田迪也先生は、この現状を心配され、幸い本市にある国語同好会に話をもちこまれました。会員は十名内外の小学校の先生ばかりですが、全員異口同音に賛同し、民話集の発刊を思いたちました。と言うわけで意気大いに上がりましたが、何と申しましても素人作家ばかり。子どもたちに作文指導や読書指導はやっていても、作品を書き上げた経験のある者はひとりもいません。

とにかく、名作はできないにしても小学校の子どもたちに、読み易いわかり易い、楽しんでもらえるものを書こうと言うことで出発をいたしました。

まず手がかりをつかむために、市内の全小学校にご理解とご協力を得て、趣意書の印刷と配布をお願いしました。おかげで孕ケ瀬池に伝わる伝説をはじめ十九話の端緒をつかむことができました。こうしてこの民話集は、第一歩をふみだしたのです。今後は先輩の皆様方のご指導をいただいて一層の発展を期したいと願っています。

昭和五十二年三月二十五日

各務原市国語同好会会員
各務原市那加第一小学校長　杉　山　郁　男

目　次

一　あわずのちようちん　那三小　長谷川　恭子
二　西入坊の蛇骨　稲東小　中村　勝行
三　きんちようつかの話　鵜三小　阿部　義弘
四　うばがふところ　谷務小　坂井　多美子
五　いろは茶屋　鵜二小　国定　仁子
六　赤ほし山の立て岩　鵜一小　勝野　淑代
七　とうもんやつこ　蘇一小　宇野　孝子
八　じんろくやしき　稲東小　中村　勝行

企画・編集　谷務原市教育委員会　河田　迪也

谷務原市立図書館蔵書

あわずのちようちん

むかし、むかし、おばあちやんが、子どものころのことや。

お月さまのでない、まつくらな夜、いまにも雨が、しとしとと降り出しそうな、むしあつい夜になるとな、きまつて、おとうが、

「外に出るな。どんなことがあつてもやぞ。おかあも、つかいに行くでねえ。またあ、あの、ちようちんが、おつてくるかもしれねえで。」

と、よくよく、いいきかされたもんやつた。

そのちようちんというのはな。

みようなことに、月のない、やみ夜にかぎつ

て見えるといらしいが……。

そら、あの常貞寺の前から、神置までのつつみを歩いとると、ちやんとだれかが、見るというんじや。

それが、ふしぎなことに、ちようちんをもつている人の姿は、見えんのに、スタスタ、スタスタと、ぞうりの音だけが、たかく聞こえてくると、目の前に、だんだんあかりのついた、ちようちんが、近づいてくるのやと。

「おりやりや。なんだ。」

と、よーく目をひらいて見るんじやが、どうしても、すがたが見えないんじやと。

そして、ちようど、二・三間まえまできて、ハタとその足音が、とまつたかと思うと、ふつと、ちようちんのあかりも消えるんやとよ。

するとな。

こんどは、うしろに足音がするんで、ふりかえると、また、ちようちんにあかりがともり、シャリシャリ、スタスタ、ぞうりの音だけがきこえて、だんだんあかりが、とおざかつていくそうな。

いつたい、すがたなしでこのちようちんを持つてあるくのは、だれやろうなあ。

おばあちやんは、それがききとうて、じつさまにせがんだ。

そしたらな。じつさまは、こんな話をしてくだされた。

あれは、江戸時代のおわりのころのことや。徳川幕府が世の中を、おさめていた武士のころのことやけんど。

幕府の力が、だんだんおとろえはじめ、世の中では、政治をする人は、おさむらいじやなく、天皇でなくてはいかんと、さかんに、となえる人々がでてきての、そうぞうしいありさまじやつた。

ほいで、となりの村にも、ひとりの武士が住んでなされた。

名は、竹宗というて、鼻すじは通つて高く、眼は、ランランとかがやき、口は、ま一文字

にむすんでな、まつたく、ほれぼれするような、そりやありりしいおさむらいじやつた。
それでよ、村の若い娘ごらは、みんなこの、おさむらいに、たとえ、ひとことなりとも、ことばをかけてもらいたいと思つていたんやつて。
できることなら、嫁にもろうてほしいと思つたかもしれん。
そしたところが、その竹宗さまには、すでによ、ひとりのいいなづけがあつて、どうにもならなかつたんや。
〝やえ〟と、いうて、生まれる前から、竹宗の嫁にと、約束されていたんやな。むかしのことやで、いつたんきめたいじよう、それをかえることは、まず、できなんだじやわい。
もちろん、この前渡村の娘ごじや。
それがのう。生まれた時には、あまり目だたなかつたんじやが、顔に黒いあざがあつてのう。それが、大きくなるにつれ、だんだんはつきりとわかるようになつてきての、その上、かわいそうに、片足が少しみじかかつたという。
ほいで、なんとかなおらねえもんかと、薬草をせんじてのんだり、いしやどのに、見てもろうたりしたんじやが、むしろ、ますますこくなるばかり。
男つぶりのいい竹宗にくらべて、なんて、いじのわるいくみあわせになつたんじやろう。
竹宗は、いつたん、とりきめられたこのちぎり、武士の名にかけても守りとおさねば。

と、やえの気だてが、ええだけに、何度も、自分にいいきかせては、みたものの、やつぱり、年ごろになつた今、ありたびごとに、いや気がさして来たらしい。
けんど、やえのほうは、竹宗が、したわしゆうて、したわしゆうて、その思いは、つのるばかりじやつた。
まいにち、文をおくつた。竹宗のためなら、なんでもしよう。この身が果てるまでにと。そりやあ、よーく、つくしたそうな。竹宗が、いくさに出かけた時なんぞは、常貞寺に詣(もう)て無事を祈つたりもしたそうな。
もうすぐ、武士の世がおわれば、めようとになれると、その日をまちのぞんどつたんやろうに。

ところがじや。
月のない、まつくらな、ある夜のことよ。
きちんと、髪(かみ)をゆい、新しくぬいあげられた羽織をはおつて、やえが、いそいそと、常貞寺前の河原から、上つてきた。
ちようちんのあかりにはえる、やえの顔は、いつもとちがうて、美しくかがやき、ほんのりと、あかみをおびておつた。

竹宗から、ひさしぶりにとどいた文に、水無月の十日、五つ半の刻に、つつみで会おうと、かいてあつたんじや。

やえは、きつと、竹宗からやさしいことばをかけてもらえるにちがいないと思つて、胸をはずませ、先をいそいだ。片手にかかえた重箱には、やえが一日中かかつて作つた竹宗のすきな、ごちそうが、いつぱいつめてあつたにちがいない。

どんどんつつみを小走りに西へ西へと進んでいつた。

そいでも、竹宗のすがたはどこにも見あたらず、とうとう神置の八幡神社の鎮守(ちんじゅ)の森まできてしもうた。

「はよう、竹宗さまに、会わせてくだされ。」

と、いつしんにおいのりをし、かしわ手をうつた時じやつた。

カサカサと、雑木(ぞうき)のゆれる音がしたかと思うと、黒いふく面の男が、やえのうしろにあらわれた。

やえが、ふりむいたとどうじにサツと、刀がふりおろされ、やえのからだは、ばつたりと、地に伏した。

ちようちんは、ころがつて、赤々ともえ、やがてきえた。

何日かすぎた。
前渡の村のしゆうたちは、やえの親子がおらんようになつたことに気がついた。
そして、竹宗のすがたも、二度とこの村に、あらわれんようになつたという。
みんなで、ふしぎがつた。

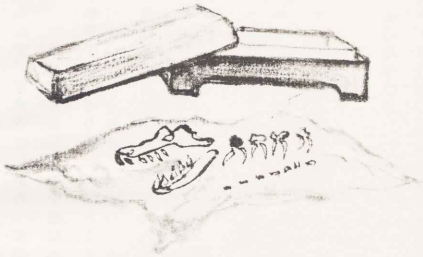
ちようど、そのころからやけんど……。
やみ夜にかぎつて、常貞寺の前のつつみに、人のすがたの見えないあかりのついたちようちんが、スタスタ、スタスタと、足音だけさせて、あるいてくるというわさが、ひろがりはじめたのは　　。
そして、これは、やえにちがいないと、だれもが思いはじめたんや。
きつと、このちようちんには、やえが竹宗に会いたくても、会えなかつた思いが、もえているにちがいないというので、だれいうとなく
〝あわずの　ちようちん〟
と、いうように、なつたそうな。

文・挿絵　長谷川恭子

註

前渡に伝わる話で、常貞寺の前から、稲羽町の神宿八幡神社の木曽川堤防で、おきたといわれている。現在も、このお寺の位置はかわらず残つている。
堤防は、自動車がひつきりなしにとおるようになつた。

西入坊の蛇骨



下中屋に、「河野西入坊」つて、お寺があるのを知つとろうが。

ほうれ。れんによ様のお祭りをする、あのお寺のこつた。

そこに、「蛇骨」ちつて、だいじやのほねがあるのを知つとるか。

うんとかむかし。行念づておしようがおつた。

情の深いおしようで、村の衆は、よるたんびに、「ぎようねんさ、ぎようねんさ。」つて、だれもが好いとつたげな。

ある秋のこつた。行念さが、いつものとおり、村の衆をよんで、ありがたいお経の話をしとると、おなごがひとり、しゆうーつと、はいつてきた。そして、村の衆のいちばんうしろに、ほそつとすわつた。

行念さの話をしずかに聞きだした。

「ほりや。見かけんおなご、だれかいの。」

行念さはふしぎがつた。

まんじりと見ると、色の白い、若こつて、うんとべつぴんの娘だが。

村の衆の中にも、気になつて、ちらつと見る者がひとり、ふたり――――。

そのうちに、お経の話もおわつた。娘は、きたときと同じで、やつぱり、ほそつと帰つてつた。

二日め。三日め。この娘は毎日やつて来る。いつでもしずかにな。

行念さは、若い娘がこうやつて毎日くるのは、何かわけがあるんにちがわんと思つてな、何日めかに、そのわけをたずねてみたんよ。

「おしようさん、わたしは、きようまでの命です。あしたの朝はもうこの世のものではなくなります。ところが、わたしは、生まれてから、ずつと、人にめいわくをかけてきました。悪いことをしたわけではありません。でも、わたしを見て通る人は、みんなびつくりしておそろしがります。そして、わたしをきらいます。わたしは、そのたびにはずかしい

思いをしてきました。はじめのうちは、どうしてなのかわかりませんでした。でも、そのうちに、これは生まれる前に、何かとんでもない悪いことをしたにちがいない。みんなにきらわれるのはそのむくいにちがいない。そう思うようになつたのです。それで、おしようさんの教えにおすがりして、少しでも、つみをゆるしていただきたいと思つて、こうしておまいりをしているのでございます。」

娘はそう言つたと。

行念さは、じいつと聞いとつた。だがな、行念さには、どうしてもわからんことがある。

「娘さん、おまえさまは、そうも若こて、だれにもまけんぐらいべつぴんじやに、なんしておそれられたり、きらわれたりすんじやな。」

「はい、わたしは、こうして、おしようさんの教えを受けにくるときだけ、こんなに美しいすがたになれるんです。ふだんは、わが身でもおどろくほどみにくいすがたなんです。」

「すると、おまえさまは、なんぞの化け身じやと言わつさるか。」

「そのとおりでございます。おしようさんの前に、みにくいすがたをお見せするのはつみの深いことです。それで、わたしのすんでいる池のそばの、春日の神様におねがいして、命とひきかえに、おしようさんのところへくるときだけ、こんなに美しいすがたにしていただいているのです。七日の間だけというやくそくで、きようがやくそくの七日めでございます。」

「ほれで、あしたの朝はこの世のものでないと言わつさつたか。」

行念さは、娘のかわいそうな話に、大きなため息をついた。

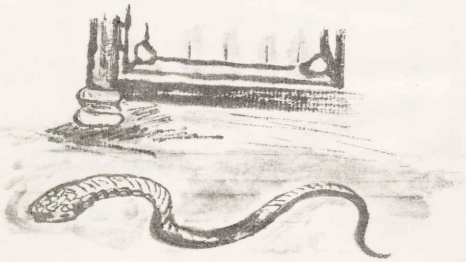
娘は、まつ黒にすんだ目えに、なみだをうかべてうつむいとつたが、そぼつと、顔をあげると、

「わたしは、おしようさんのそばに、いつまでもおいていただきたいと思つております。どうか、わたしの身がらを、お寺のすみにうめてください。」

つて、たのむんだと。

そこはそれ、情の深い行念さのこつた。心ようひきうけてやつたげな。

娘は、すつかり安心したんだろう。ほつこりとわらつて、自分のすがたをだれにも見られんように、朝早う、行念さに見つけてほしいつて言うと、しずかに帰



つて行つたそうな。

さて、次の朝だ。行念さは、だれよりも早う目えさましたん。

外は、まんだ朝もやがたつとる。東の空に、うつすらと夜明けの陽がさしとる。行念さの首すじに、ひんやり朝つゆがおりてくる。

行念さは、急いで門をあけた。とたんに、はつと、その場になおりこんで、お経をとなえだした。何を見たんだろうかい。

行念さの小つさいひとり言が聞こえる。

「ああ、あの娘は、春日神社の池にすんどつた。だいじやの化身じやつたか。人のすがたをしとらんだけで、悪いことなんぞ、なんもしとらんに、生きとるうちは、みんなにきらわれ、死んでからまで、人の目えさけんならんとは、なんともあわれなことじや。」

門の前には、身のたけ九尺もあろうかい。大きなだいじやの死がいが横たわつとつたんだと。

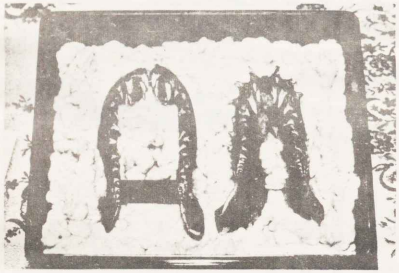
行念さは、お経をすませると、娘とのやくそくどうり、本堂のうらの、のうこつ堂の下にうめてやつたそうな。

れんによ様のお祭りの日、西入坊に行つてみな。きりのはこにはいつた、だいじやのほねを見れるに。

情の深い行念さのこつたから、うめるおりに、まるごとうめてしまうなあ、かわいそうに思つたんやろう。頭だけ、はこにおさめて、だいじにくようするよう、伝えてきたんや。

文　中村勝行
挿絵　柳　勇

※なおる・・・・・すわる
※九尺・・・・・・およそ3メートル
※のうこつ堂・・・死んだ人のほねをお祭りするたてもの



＜蛇　骨＞
各務原市下中屋町「河野西入坊」蔵。
西入坊より東へ約５００米、木曽川堤防下。
春日神社端の池にすんでいたといわれている
大蛇の骨。現在、池は残つていない。

きつねちょうづかの話

それはずつと昔のことでした。村の中を、大きな川が流れていました。

川の近くには、広い沼が続いていました。

その沼には、いつもたくさんの野鳥や、渡り鳥がやつて来て、小魚をとつたり、水あびをして、楽しそうに遊んでおりました。

鳥の群にまじつて、たくさんの鵜の姿が見られるところから、村の人たちはこのあたり一帯を、鵜沼と呼んでおりました。村は川をはさんで二つに分けられ、沼に続いて田畑が広がり、のどかな農村でした。しかし川のこちら側は、すぐ後に山がせり出しておつて、土地もやせていて、せまい所に大勢のひやくしようが、貧しいくらしをしておりました。

一方、川向うの村では、よく肥えた田畑からたくさんの作物がとれて、村人たちは豊かなくらしをしておりました。やせた土地で貧しいくらしをしなければならないひやくしようにとつて、川向うのひやくしようのくらしは、とてもうらやましくうつりました。

その頃、二つの村に二つのお城がありました。

川の向う岸には、いつも深い川霧につつまれている城があつて、みんなはそのお城を、霧ケ城と呼んでおりました。そして川のこちら側には、たなびく霞の中に霞ケ城といわれる城がそびえておりました。

ある時、この川をはさんで田畑のさかいのことから、ひやくしようの間に争いがおきました。川をはさんで、すきやくわをふりかざしての恐しい争いが、何日も続きました。

ひやくしようにとつて大事な田畑はふみ荒され、家は焼かれ、大勢のひやくしようが、傷ついたり、死んだりしました。戦いにつかれたひやくしようたちは、親を失い、兄弟を失つた悲しみに、しばらくの間は仕事も手につかず悲しみにくれていました。

けれども、やがて生き残つた村の人たちは、自分たちの土地を守るために戦い、そして死んでいつた仲間を手あつくとむらうことにしました。

くずれ落ちた饅ヶ城のあとに、大きな塚をつくつて、亡くなつた大勢の仲間をそこにおまつりしたのでした。

城は高い山の上にありましたが、村の人たちは、春になると道ばたに咲いている美しい草花をもつてお参りをしました。

また、秋になると、山の栗や柿の実を持つて集り、死んでいつた仲間の人たちに話しかけるのでした。そうしたことがくり返されて長い月日が過ぎていきました。

村はまたいつかのどかな蒲沼の里にもどりました。村の中をゆつたりと川が流れて、子どもたちの明るい声がひびいていました。

けれども、もともとやせた土地のうえ、荒れた田からは、ほんのわずかな米しかとることができませんでした。ですから、ひやくしようたちの生活は、前にもまして苦しくなつていました。あれ地を開こんしたりして、一粒でもたくさんの米をとろうと、ひつしになつて働きました。

しかし、やせた土地はいつこうによくなつていきません。

働いても働いても、くらしが楽にならないひやくしようたちの間に、やがて不平や不満がつのり、仕事に精を出さなくなり、村の土地はどんどん荒れていきました。

ひやくしようたちの暮しも乱れ、田畑には草がぼう〳〵と伸びていきました。

「せめて正月ぐらいは、米のめしを腹いつぱい食いたいもんだろう。」

「川向こうのようなくらしがしたいもんだ。」

「子どもだけには、ひもじい思いをさせたくない。」

こういつたひやくしようたちのなげきに、村の庄屋さんは、いつも心を痛めておりました。苦しいくらしの中で、ひやくしようたちの心も、だんだんとげとげしくなつていきました。そして、村のあちこちでは、ひやくしようの間にけんかやもめごともよく起こるようになりました。

そんな、ある晩のことでした。

村の行く末を心配していた庄屋さんに、夢まくらが立ちました。

大きな金の鳥にうちまたがつた老人が、夢の中に現れたのです。

「――わしは、前の戦いで敗れた饅ヶ城の城主じや。いつも山の上からこの里のようすを見守つておつたが、ちか頃は、この村も荒れ放題に荒れてしまつた。とても悲しいことじや。ひやくしようたちは、昔のように仕事に精を出すこともなく、毎日ぶらぶらと

遊んでばかりいる。豊かな川向こうのくらしをうらやましく思つているだけでは、どうにもならん。

そこでじや。わしらを今まで大事にお祭りをしてくれたお礼に、わしがこの村をいい村に変えてやろうと思うがどうじや。それには、鳥の鳴き声を聞かなきやならん。それも、あの塚の上で、旧正月の元旦の朝、金色のチャボが夜明けを告げることになつておる。その鳴き声を聞けは、必ず幸せなくらしができるようになる。

だが、その鳴き声は、誰もが聞けるわけじやない。その声を聞くためには、毎朝早く起きる者で、しかも、一日に一回は、汗を流すもんでないと、その声は聞こえんのじや。

――――」

そこまでいつたかと思うとその老人は、金色に輝く鳥にまたがつて、すつとどこかへ、消えてしまいました。

そこで庄屋さんは、パツと目がさめました。

次の日、庄屋さんは、村のひやくしようたちを家に集めて、ゆうべの夢のお告げを話しました。

その話を聞いたひやくしようたちは、口々に、

「ようし、わしがその一番鳥の鳴き声を聞いてやるぞ。」

「おらあには、もう汗を流して働くなんて、できんわい。」

「そんなことをしたつて、米がたんととれるんでもないんでのう。」

などと、めいめいに話し合つて帰つていきました。

けれども、翌日からひやくしようの中には、自分がまつさきにその声を聞いて、幸せになろうとする者が出てきました。

朝早く起きて、汗を流しながら山の草を刈る姿が、見られるようになりました。また、あるひやくしようは、荒れはてた自分の土地から、木の株や大きな石を取りのぞいて、汗を流す者も出てきました。

こうしたひやくしようの姿が、村の中に三人、五人、十人とふえていきました。

やがて、ひやくしようたちは、きそつて早起きをし、一日に何回も汗を流して働く姿が、村のどこにも見られるようになりました。伸び放題になつていた田畑の草も、だんだんと少なくなつていきました。

田からは、米も取れるようになりました。

村の中には、明るい笑い声があちこちで聞かれるようになりました。

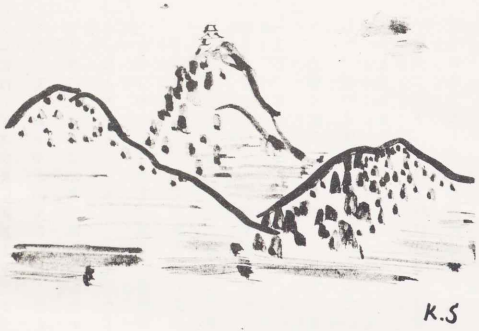
いつか、金色のチャボの声が聞けることを信じて、ひやくしようたちは仕事に精を出し、いつしようけんめい働くようになつたのでした。

新しく山を開こんしたりして、田畑もどんどんふえていきました。ひやくしようのくらしも、ずつと楽になつてきました。

やがて、川向こうの村にまけないほど豊かで、平和な村に生まれかわりましたが、その後もひやくしようたちは、金鳥の鳴き声がきつと聞けるという夢と希望をもつて、汗を流して働き続けました。

それから、だれいうとなくその塚を、金鳥塚と呼ぶようになり、今でも、村人たちは、大切にしているということです。

（阿部義弘）



うばがふところ

むかしむかし、岐阜城に　若くてりりしいおとのさまが住んでおられました。色白でそれはそれは美しいおひめさまをおくがたさまにむかえられました。お城の庭つづきには、金華山があり、その山頂には天守閣がそびえ立つていました。清らかに流れる長良川のほとりを散歩されたり、広いやしきの中では、春は花見、秋は月見と、とてもしあわせな毎日をおすごしでした。

二年ほどすぎた夏の昼さがり、おくがたさまにかわいい赤児が生まれました。男の子だつたので、お世つぎができたと、おとのさまは、ことのほか大よろこびされました。

「若君の誕生だ。さあ、祝いの宴をいたすよつて、みなの者をよせ集めよ。」

と、おとのさまは　もう　うちようてん。ところが、そのとき、

「との。申し上げます。東軍が多勢押しよせて参りました。今頃は加納を過ぎて、わが城下に入らんとしております。いかがいたしましよう。」

と、天守閣から息をきらして走つて来た家来が伝えました。おとのさまの顔は　さつきとはうつてかわつて、目がぎらりと光りました。

「よし。すぐ兵の用意をいたせ。よいか、できるだけ多く集めるのだ。」

と、力強く家来に申しつけ、ねているおくがたさまと、生まれたばかりの赤児を見つめました。その目は深い決意にうるんでいました。そして家来に何か耳うちされたかと思うやさつと立ち去られました。

家来二人と、うばと呼ばれる子守役の女の人が、おくがたさまと赤児を連れて　にげることになりました。戸板にふとんをしいて、おくがたさまを寝させたまま運ぶのです。うばは赤児をしつかりだいて走りました。敵は金華山とお城をとり囲んでせまつてきます。道を通つては見つかるので、山の中を逃げなければなりません。戸板の上のおくがたさまも必死で板にしがみついておられましたが、苦しみにたえかねて、

「どうか、わたしをここにすておいてください。そのかわり、この子をどうか無事に育ててください。」

と、手をさしのべながら言われました。

「何をおおせられます　おくがたさま。若君さまのためにも弱音をはかないでくださいませ。ごらんくださいませ、このかわいい若君さまのお顔を。」

と言つて、うばは赤児をおくがたさまに　そつとお見せしました。かわいい赤児の顔を見ると、おくがたさまは何としても生きなければと思われたのでしよう。美しい目から大つぶの涙をこぼされました。

「ここからは戸板はとても無理でございます。おくがたさま、どうぞ　わたしの背に。さあ、早く。」

といつて、家来はおくがたさまを背おいました。おくがたさまの目からは、またもあつい涙があふれ出ました。

真夏の山の中は草木やいばらがしげり、これをかき分けながら　無我夢中でにげました。顔は手はいばらでひつかき、きずだらけであちこち血がにじんできました。まむしやむかでもいるのでたいへんでした。うばは赤児をふところでつつむように背をまるめて進みま

した。暑いのと、ゆり動かされるため、赤児は苦しそうです。必死でにげているうちに、うばは、おくがたさまたちと　はぐれてしまいました。

とほうにくれていると、とつぜん近くで、

「ズドン!!」

と、そつぽうの音がするや、

「おくがたさま……。」

と　泣きさけぶ家来の声がしました。かと思うと、またてつぽうの音が、

「ズドン!!」

「ズドン!!」

と二つ、鳴りひびきました。うなり声を聞くなり、うばは足がふるえてその場に立ちすくんでしまいました。赤児は大きな口をあけて今にも泣き出しそうです。あわてて、うばはちぶさをくわえさせました。ところが、ちよつと吸つただけでやめてしまうのです。何度もふくませてみましたが、吸おうとしません。よく見ると、お乳が全然出ていないのです。それでも、

『若君さまは何としても、わたしがお守りしなければ……。』

と、赤児をだきしめて　決意をあらたにするのでした。

敵の遠ざかるのを待つて、また山の中を進みました。

どのくらい歩いたのでしようか。夏の長い日もかたむいて、蚊がわんわん音をたてています。赤児が泣き出しました。お乳をふくませましたが　泣きやみません。着物は破れ、汗みどろのからだのきず口よりも、うばは、お乳が出なくなつた心の痛みの方が大きくうずきました。あまりのショックにお乳が出なくなつてしまつたのでした。おなかがすいて赤児はますます泣くばかりです。どこか人の住んでいる家はないものかと　さがしましたが、全くの山の中で見あたりません。日はとつぷりと暮れてしまいました。

『わたしのこのお乳さえ出てくれたら……。』

と何度も乳房をしぼつてみましたが、ひとしずくも出ないのです。小さなからだに大きな口をあけて声もかれがれに泣く若君をだいて、うばは　まつくらな山の中を歩きまわりました。

つかれはてて　ひざまづいたとき、ふと耳をすますと　ちよろちよろと何か水の流れるような音がします。音をたよりに行つてみると、水のわき出るところがあるのでした。とつさに手ですくつて飲んでみると、その水のつめたくておいしかつたこと、今まで食べたどんなごちそうよりもおいしかつたのです。さつそく泣きつかれた赤児の口へ、木の葉ですくつて飲ませてやりました。すると赤児が泣きやみました。あまりおいしそうに飲むの

で何度もすくつて飲ませました。おなかがいつぱいになると、赤児はきもちよさそうにねむつてしまいました。

『若君さまのお母上さまは……。』

と思うと胸がつまつて　ぐつと涙がこみ上げてくるのでした。うばは手をあわせ、目をとじていつしようけんめい祈りました。

『神さま、どうか　若君さまをお助けください。なにとぞ、わたしのお乳が出るようになりますように。』

赤児をそつとねかせると、また必死に祈り続けました。そしてうばもその水をおなかいつぱい飲みました。ふとみると、ふところがぬれているではありませんか。ふしぎなことにお乳が出るようになつたのです。ほつとしたうばは、急につかれが出て深いねむりにつきました。

足音に目をさますと、朝早く　たき木をとりに来たおじいさんがやさしく声をかけました。うばがわけを話すと、おじいさんは言いました。

「そうすると、このお子は信長さまのひこさまかな。この那加村の山も田も畑も　みいんな信長さまがくだされたのや。村の方は残党狩りがきびしいで、村へおりとんさつては

あかんぞな。わしが食べもんや着るもんを持ってきてあげますでなも。」

こうして　この地の百姓たちにかくまわれて、うばはこの山奥で若君を育てたということです。

それ以来、ここから出る水を飲むと、よく乳が出るようになると言われ、いつしか、うばがふところと呼ぶようになりました。子どもが生まれる前や生まれたあとに、このあたりの人はかならず、おまいりして水をもらうようになりました。今も遠方から来て、水を持ち帰る人があります。

わたしが生まれた日にも、父は野良仕事を終えてから、暗がりで山をこえて、この水をすいとうにいっぱいもらってきてくれたと母から聞きました。

（坂井多美子）

いろは茶屋

むかし、このあたりは　家一けんとてない
ひろい　ひろい　くさはらでした。
そのはらつばのまん中を　一ほんの細い道
が　まつすぐに　とおりぬけておりました。

ある日の夕ぐれ、その道を、とぼとぼと
ひとりのむすめがとおりかかりました。どこ
からきたのでしょう、あるきつかれたとみえ
て　足もとがふらつき　今にもたおれこみそ
うでした。名まえを　おはつといいました。

道ぐろのすすきのほが　風でゆれるたんびに　なにやらうしろからついてくるようで足がすくんでしまいそうです。

「はよう、どこかとめてくださるところはないものだろうか。」

と、おもわずひとりごとをつぶやいた、ちょうどそのときはるかむこうに　ぽつつとあかりが見えました。

「やれ、うれしや。」

と、おはつのつまさきにもしせんとちからがはいり、あかりをめあてにしばらくあるきつつけてやつとの思いてその一けんやにたどりつきました。さいわいここが〝いろは茶屋〟といつてたびの人をとめる宿屋だつたのです。

おはつはあるぎつかれてへとへと。ようやくとめてもらえるへやにあんないされ、はやめにねどこへはいつたまではよかつたのですが、さあ、たいへん。雨戸がカタカタ。ろう下はみしり、みしり。あんどんのあかりがゆらゆら。それがたんだん人かけみたいに見えたすのです。おそろしくて、おそろしくて、ふとんを頭からかぶつて目をつぶつてみてもやつはりねむることができません。

ちようど　うまいぐあいにとなりのへやに　たびの坊さまがとまつておいでした。そこでおはつは、

「もうし、おとなりのお坊さま。なぜかこわくてねむれませぬ。どうぞ　おたすけくださいまし。」

と、たのんでみました。たびの坊さまは

「むすめごおひとりのたびかの。それはそれは　こころぼそいことじやろう。」

と、いいながらおはつのかおをしげしげとながめました。そしてそのかおの青さにおどろきました。

「はい。なにかにつけられているような気がしてなりませぬゆえ　　。」

お坊さまはその話を聞いてしばらく目をとじて考えておられましたがやがて

「そりやあお気のどくなことじやな。では　わしがへやをかわつてしんぜよう。さあ、さあ、こちらのへやへおいでなされ。」

と、やさしく手まねきしてくだされるのでおはつはすつかり気も落ちつき　お坊さまのいわれるとおりへやをかわつて床についたのです。

それからどれくらいたつたでしよう。おはつの道中をずつとつけてきた男がそつとへやにはいつてきました。そして　やにわに

「やい。むすめ。いのちと、かねはもらつたぞ。」

と、かたなをつきさしました。
「どつこい。その手はくわぬ。そんなうまいぐあいにいくもんか。えい！。」
坊さまは　男ののどもとを下からひとつきにさしてしまいました。
「ウー。」
そして死体をじぶんのねどこにひつぱりこむとふとんをふかくかけました。
しばらくしてまたこのへやにはいつてきた人かげがありました。それは手に大きなかたなをさげておはつをねらうこの宿のてい主でした。今しがた血なまぐさいころしのあつたことなど、ちつともしりません。むすめをただひとさしと　ねらいさだめてふとんをつきさしました。たしかに手ごたえがありました。でも、何の音もしません。
「はて。ふしぎなことよ。」
と、つぶやいてあかりを近つけてよくよくのぞいたてい主は
「あつ。」
びつくりしたのなんのつて、のどのおくがやけつくようにからからになりました。それもそのはず　なんと三年前に家出して　ゆくえのわからなかつた我が子でした。
「――――。」

「しらなんだ。しらなんだ。ああしらなんだ。
我が子の死体をつきさしてしもうたわい。」
からだがどつとあつくなつて、そしてあつと思うまにひやひやとつめたくなりました。そこへお坊さまがおとり出てきました。
「きこえたわ、きこえたわ、やい、てい主今こそ　たびのしゆうのむねんをはらしてくれようぞ。天はつと思え！。」
と、いうが早いかかたなをふるいました。
「ん。――――。」
宿のてい主はころされてしまいました。こうして　かかみのをとおるたびの人々を苦しめていた鬼のような親子は一晩のうちにほろびてしまいました。
あやういところを助かつたおはつがこのこ

とをお上へもうしでたそうです。やがてお上の命令で　ぎょうさんの人のいのちをうばった〝いろは茶屋〟はおとりこわしとなりましたが、たび人をころして捨てた井戸と、井戸ばたの桜の木だけは昔のままのこりました。そして桜はくる春ごとに美しく咲いて人目をひき、みんない死んだ人々のれいをなぐさめているようだといってながめました。ところが井戸の中の死者のれいはあとあとまで毎晩まよいでたそうです。

その、たびの坊さまのことですが、ねずみ小僧といって江戸の神田の生まれ、家がまずしいために親に捨てられてしまった子だという話です。そしてばくちうちの親分〝吉兵衛〟あだなは〝ねずみ〟という人に拾われ　はじめは〝ねずみの幸蔵〟とよんでいたそうですがいつのまにか〝ねずみ小僧〟というようになったとか。ねずみ小僧は　悪いことをして金もうけをした商人の蔵ばかりねらっておし入り、びんぼうな人たちにその金をわけてやつたと伝えられています。

何年か後、おはつは〝ねずみ小僧〟が江戸でおしおきされたことを耳にしました。もつとおどろくことに〝いろは茶屋〟でいのちをすくつてくだされた坊さまだつたこともわかりました。ねずみ小僧がどうしておはつを助けたのかは今でも不思議なこととされていますが、人はみな美しい心もちやんともつているものよと村の人たちはうわさしてきました。

附記

おはつが　いろは茶屋　でころされた人々のため、あわせて「ねずみ小僧」を供養するため、土地の有力者　前野村野畑　横山忠兵衛にたのんで建ててもらつたといわれる供養塔が現在でも残つている。碑石は長い間　いろは茶屋　あとに建つていたそうだが今は少し位置がかわつた。木立の陰にひつそりと建つ碑石には左のような文字がきざまれている。

奉納大来妙典六十六部日本廻国供養
日月晴明
江戸本所住
行者　浄心

左横には
前野村
取　持　横山忠兵衛

岐阜県各務原市那加町
名電「岐阜大学前」駅北側

赤ぼし山の立て岩

むかしむかしのことなのや。

美濃の各務原は広い広い野原と山におおわれておつてな、その中ほどに、赤ぼし山という山があつたのや。

ある日、とつぜん、その村の六兵衛さんの家に旅の姿をした若い男がとびこんできてな、

「た、た、たすけて、たすけて下され。」

と、声もおろおろにまつ青になつて六兵衛さんにしがみついたのやと。

六兵衛さんは、何が何だかわけがわからんばかり。

「まあまあ、おちつきなされ。いつたい、どうなされたな。おまえさん、旅人のなりやが。」

六兵衛さんはこういいながら、旅の男を静かにすわらせたのやと。

「聞いて下され。」

旅人は、まだ、息をはずませながら、こんな話をはじめたのやと。

「わたしは伊勢に行く旅の者でしてな、けさ、家を出て、ちようど、昼近くに、あの山までたどりつきましたに。そしてわたしはその山のふもとに、あずまやを見つけましたのや。そこは丸たんぼとわらでかこつてあつて、ちよつと一休みするのにちようどよかつたですに。」

旅人の話はこんなふうに続いたのや。

旅人は中には入つて、丸たんぼうをくんだ台に腰をおろしたそうな。

すると、女の人があらわれてな、

「だんなさん、お茶はどうですか。」

というてな、食べたこともない、あまそうなぼたもちを二つ、旅人に出したそうな。

「それは、それは、おおきに。」

旅人は、そういうてな、お茶をひとのみしてから、あんこでまぶしたぼたもちを、ぱくりと口に入れたそうな。

「うへ、うへ。」

あまいあんこだと思つたら、なんのなんの大ちがい。にがいとも、からいともつかない、どろの感じでな。さらのぼたもちを見ると、確かにあんこでまぶしてあつたはずのぼたもちがどろまんじゆうに見えたそうな。

「キャ――――。」

旅人は、にげようとして、自分のすわつたあたりを見まわしたそうな。ところが、そのあさ、家で作つてもらつたべんとうが見あたらなんだそうな。旅人はいちもくさんにそこをにげさつたそうな。

旅人の話は、そこで終わつたのや。

二、三日たつて、六兵衛さんは、そのあずまやを見ようと思い、赤ぼし山に木を切りに出かけることにしたのやと。木を切るなたや、草がりがまや、にぎりめしをかごに入れて背おい、いせいよく、山に向かつたのや。

木を切りたおし、それを切つては、まきのたばをいくつか作つてな、それから旅人のいうた、あずまやに行くことにしたのやと。

旅人のいうたとおり歩いて行くと、なるほど、小さなあずまやが見えてきたのやと。

「ごめん下され。」

六兵衛さんがそういいながら、丸たんぼうの台に、こしをすえると、おくで男が、もちをこねるのが見えたのやと。

その男の女房らしい人が、お茶をもつてきてな、

「だんなさん、ぼたもちはいかがです。」

つてな。

「いや、それより、草もち、おくんなさい。」

「は、はい。」

しばらくすると、草もちがきたのやと。青々したよもぎは、かおりがたこうて、口の中に入れると、とけてしまいそうな草もちやつたと。

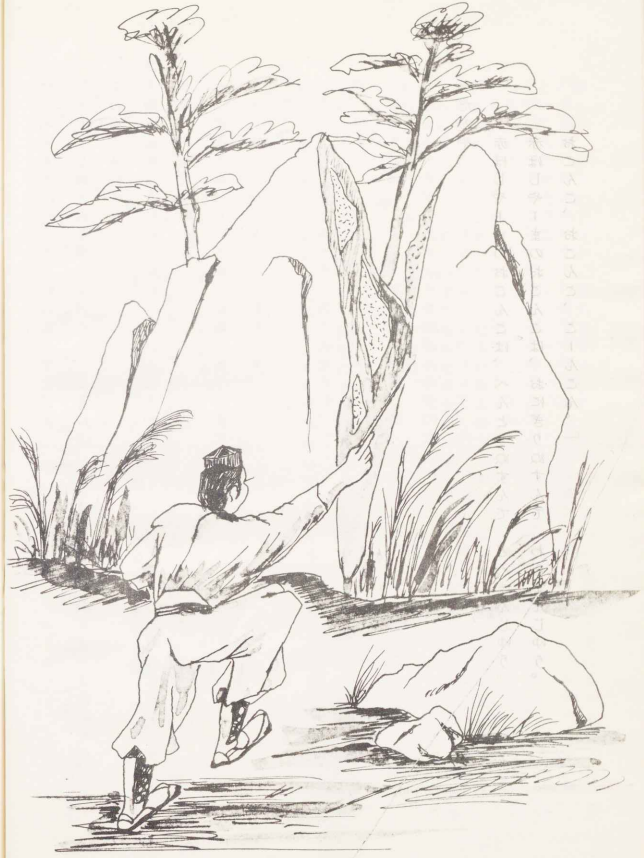
六兵衛さんは、それをちよいとつかんで、口の中に入れたのやと。

「こ、こ、こりやあ、ぺぺツ、ぺぺツ　・・・・。」

やわらかい草もちは、口の中に入れたとたん、わらになつてしまつたのやと。

六兵衛さんが気がつくと、あずまやはあとかたもなくてな、その上、六兵衛さんが、家

で作つてもらつた、にぎりめしべんとうまで、見あたらなんだのやと。
ふと前を見ると、二、三間先を、きつねが、二ひき、あつというまに、しげみの中に、すがたをけしたのやと。
六兵衛さんは、息もたえだえに走つて家へもどつたのやが、声一つ出なんだのやと。
六兵衛さんのおよめさんは、あつけにとられてな、
「おまえさん、木を切りに行きなさつたな。まきももたずにどうなされた。草がりがまはどこへおいてきなさつたかね。」
とな。
そのうち、六兵衛さんは、赤ぼし山のあずまやの話を始めたのやと。
それからというものは、村人は、けつして赤ぼし山にはよりつかんようになつたのや。
そして、六兵衛さんの村で、べんとうをぬすまれたという村人はほかにも何人か出てきてな。そうそう、ねぎはごんぼもあらされるようにねつてな。村人たちは、こまりにこまつたのや。
「赤ぼしやーまのおこんこは、べんとうぬすんで　どろまんじゆう。
赤ほしやーまのおこんこは、おにぎりぬすんで　わらまんじゆう。
おこんこ、おこんこ、こーんこん。」



子どもんたは、こんなうたをうとうたけれど、赤ぼし山には、けつして、あそびにいかんようになつたのや。

ある日、六兵衛さんが、赤ぼし山から、だいぶ、はなれた田んぼで、いねかりをしとると、

「わしは奥州に行きたいが、どう行けばよいか！」

と大声たててたずねる男の声がするのやと。六兵衛さんが、おどろいて見上げると、背もよこも、六兵衛さんの二ばいもある大男だつたのやと。

「おぬし、何者だな。」

六兵衛さんがたずねるとな、

「わしか、わしはな、天下の弁けいじや！」

その男は、足で地面をたたきながら、こうこたえたのやと。

「へえ、弁けいやと。」

「そうじや、弁けいじや。人目につかんよう、義経とわかれわかれに、義経のそだつた奥州にのがれるのじや。」

「それで、京の都から、ここを通つて奥州へ……。へう　なるほど。」

六兵衛さんは、こんなことを話しているうちに、赤ぼし山のあのきつねのことを思いだしたのや。

「弁けいさまなら、ちよつとたのみがあるんやが……。」

とな。

「たのみだと。」

「へ、へい。あの山には、それはな、こんじよわるいきつねがおりますに。弁けいさまそいつを退治してくださらぬか。」

「きつねだと！　ならば案内せい。」

「へい。」

二人は、あずまやの前を通りこし、赤ぼし山の頂上にのぼりつめたのや。

「いいながめだ。ところで、おまえさん、奥州に行くにはどう行くのじや。」

と弁けいがたずねたのや。

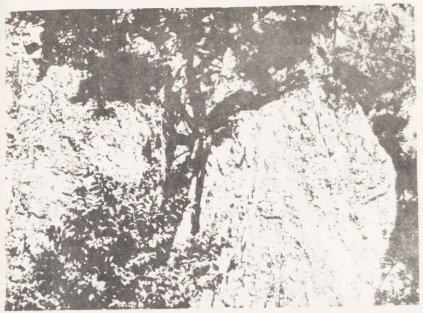
「あそこに、お寺の屋根が見えとるが、そこまで行きなさつたら、こんどは、道が二つに分かれていますに。左の方の道をどんどん行きなさると、鎌倉の方に行く、大街道に出なさるに。」

六兵衛さんがそう教えたかと思うと、

「おぬし、鎌倉に行くのか！」
と、とつぜん、あらあらしい声がしたんや。
二人が、おどろいてふりむくと、よろいかぶとに身をつつんださむらいが、刀をぬいて弁けいをにらんでいるのや。
「こんな山おくに、さむらいがおるとは、どういうことじゃ。」
弁けいはふしぎでならん。そのさむらいは、弁けいよりももつと体が大きくて、目は、らんらんとかがやいておるのや。弁けいは、旅すがたで刀も弓矢ももつておらん。
六兵衛さんは、松の木のうしろにかくれて、二人のようすを見守つていたのや。
弁けいは、どうするのかつてな。
すると、弁けいは、大岩のそばに生えているすすきを一本ぬきとつてな、そのすすきを手にもち、大岩に向かつて、しずかに目をつぶつたのや。それからゆつくり目をひらき、もつていたすすきで、
「えいつ。」
と大岩めがけて、ぶつたたいたんや。
するとな、たたみ五まいくらい合わせた大岩は、かみなりがとどろくような大音をたててな、それから、ガラガラと真二つにな、その大岩は、われたんや。

「すすきで、岩をわるとは、なんと強い人間よ！」
さむらいは、そういつたかと思うと、パッとすがたを消してしまつたのや。
「おや、今のさむらいは。」
弁けいが目をこらしてあたりを見まわすと、三間くらいさきを、こそこそときつねがにげとるのや。
「あつはつは。このわしにはまいつたな。」
弁けいはそういつて六兵衛さんに別れをつげてな、鎌倉の方へ向かつたのや。
このことがあつてから、赤ぼし山のきつねは、村人や旅人にけつしていたずらせんようになつたのや。

（勝野淑代）



付記

市民会館の南に、大きな赤ぼし山がありましたが、どんどん、けずられて、今ではぐるりとひとまわりできる小山だけになつてしまいました。小山といつてもほんとうに小さく、土が少しもつてある程度です。そして、その上に、岩が二つにわれたまま立つています。

とーろもんやっこ

蘇原東島町

東門奴の話

殿様のお使いでお金を持つて歩いていた奴(やつこ)が、大金をなくし、殿様に切り殺されてしまいました。

その若者の魂が、火の玉となり橋の近くをうろうろするという。

この橋のことを人々は、「火の玉橋」というようになりました。

ほーほー　ホタル　こい
あつちの水は　にーがいぞ
こつちの水は　あーまいぞ

むかしはね、夏のはじめの夕方になると、こんな子どもの歌声が、遠くから聞こえてきたものでした。

ここ、東島のさかい川のあたりも、そんな子どもたちが、ホタルを追つて、よーくやつてきたところなんです。

でもね、夕方、子どもたちがホタルをとりに、家を出ようとすると、きまつて、おじいさんやおばあさんが、

「東門奴（とうもんやつこ）が出るで、ひとりで行くでないぞ。」
「ぜにをもつて行くでねえぞ。東門奴にとられるで。」
などと、注意するのでした。

なんでも、ちようちんのあかりのような、ボーッとした赤い火の玉が、東島から東門へ行くとちゆうの、橋の近くを、あつちへ行つたり、こつちへ来たり、フワフワ、フワフワと、動きまわつているんですつて。その火の玉はね、人が近くとスーッと消え、人が遠のくと、また見えだすのです。くらーい田んぼ道をね、まるで何か落としものを、ひつしになつて、さがしまわつているようなのに、人かげはぜんぜん見えないんです。

それを見た、おじいさんたちは、
「かわいそうに。また、東門奴が、おといたぜにをさがして、うろついとるわ。」
と、つぶやくのでした。

それは、いつのころからなのか、誰も知りません。とにかく、おじいさんのそのまたおじいさんの……子どものころから聞かされてきたのです。

この橋の、北の方に、外山という小さな山があります。その山すそに、むかし五・六軒の家がありました。そう、東門町です。

そこの人たちはね、やねに使う、かわらをやいて、くらしていました。須衛瓦（すえがわら）といつてね、とてもいいかわらで、その頃では、お寺かうーんとお金持ちの家にしか、使われないようなものでした。遠い京の都や、尾張の方にも、そのかわらは、納められるのでした。

そうやつて、もうけたお金の中から、上納金というものを、殿様に納めなければならないことになつていました。

この蘇原のへんでは、古市場に庄屋といつて、上納金や、お百姓さんが作つたお米を、年貢として集めるところがありました。

ホタルの出はじめた夏のある日、その庄屋に働く若者が、お使いとして東門の部落へ、上納金を集めにいつたのです。

若者は、このお使いが、一番いやな仕事でした。一枚一枚ていねいに土をねり、何日もの日数や、手間をかけてやつとやきあげ、遠いところまで運んでいつても、お金持ちやお役人の言いなりの、少ないお金しかもらえない、かわらやきたちの苦労を、よく知つているからでした。そんな人たちから、主人のいいつけとはいえ、またことしもふやされた上納金を集めるのは、とつてもつらいことでした。

一軒一軒まわつて、やつと集めたお金は、かなりの金額になりました。

「こんな大金　落といたらえらいこつちや。一生はたらいたとて、わしらにやかせげん金じや。」

と、大事に、ふところふかくしまいこみました。境川にかかる土橋のへんでは、もうホタルがとびはじめていました。

「こらあかん。おそうなつてしもうた。はよかえらなまたしかられる。」

と、走るようにして土橋をわたり、急いで帰つていきました。

すつかり暗くなつて、庄屋へ帰りついた若者は、思わずドキッとしてふところへ手をやりました。

「あつ、ない。ない。えらいこつちや。上納金がない。ちやんとここへ入れといたんやに。」

まつさおになつて、気がくるつたようにふところをさぐる若者の前に、奥から出てきた庄屋さまが、ぬつーと立ちました。

「なんじやと。集めた金がないやと。たわけめ。なくしたですむことやとおもうとろのか。」

若者は、どうしたらいいのかわかりません。ガタガタとふるえ声も出ません。にらみつける庄屋さんの前で、ただ小さくなつてすわりこみ、土間に頭をすりつけるばかりでした。

ちようどこの日、庄屋さまの家へは、この上納金をうけとりにお役人がきていました。話を聞いて、怒つて座敷から出てきたお役人は、

「なにつ、集めた上納金をなくしたと申すのか。このふとどきものめ。おおかた大金に目がくらんで、お前がぬすんでどこぞにかくしでもしたのであろう。ぬすんでおいて、なくしたふりをするとは、けしからぬやつじや。」

と、腰の刀を抜くと、ふるえている若者にサッと切りつけ殺してしまいました。

この若者の魂が、

「おれは、ぬすんだんじやねえ。ぬすつとなんかじやねえ。落といたんじや。落といたとすりや、このあたりじやが……。」

と、今でもあの土橋のへんを、ひつしにさがしまわつているのです。近くの子どもたちが、お金をもつてホタルとりに行くと、自分の落したお金だと思つて、もつて行つてしまうのか、いつのまにかなくなつているということです。

それからは、だれいうとなくこの土橋のことを「火の玉橋」というようになりました。

文　宇野孝子
挿絵　辻　竹男

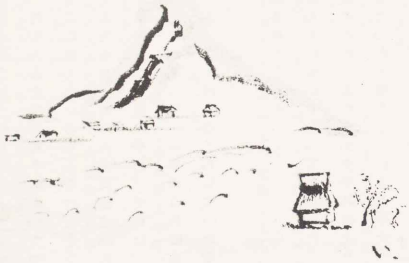
東門　奴

場所　蘇原東島町

おがせ池へ向う街道の北側を東から西へ静かに流れを境川

火の玉橋　はその境川にかかつている。東門町へのその道は、今ではまつすぐになり田んぼの間を走つている。

土橋はいつかくずれ、コンクリートの立派な橋になり、その下に白サギがむれている。



じんろくやしき

やつとかむかしの話や。

木曽川の下流の川岸にな、山脇村つて、小つさい村があつたんや。

すぐ前を木曽川が流れてな、すぐうしろには三井山が高くそびえとつた。そやから、村つてもわずか十けん足らずの家が、山のふもとにへばりつくようにあつただけや。

田んぼや畑やつて山のすそにわずかにあるだけや。そらあ木曽川の向こう岸に荒れ地はあつたがな、大きな石がごろごろしとつたり、

すすきがほうぼうにしげつとつたもんで、だあれも開こんしようとしやへなんだ。そやから、村の人んたあの食うもんつてつたら、少しの米と、少しの野さいと、ときたまとれる木曽川の魚ぐらいのもんやつたそうや。

そんでもな、村の人んたあはみんな正直ないい人ばつかやつたで、とれた米や野さいはなかまで食つとたんやと。でもな、なんしろ土地がせまいやろ。それに木曽川がはんらんすることがあつて、一年のうちに何日も水と草の実ばつか食わんならんこともあつたりで、そらあ、びんぼうなくらしやつたんやと。

ある夏のことや。

にわかに天がくもつてきおつた。なまりのような雲が空いつぱいに広がりおつた。まんだ昼やのに、あたりが夕やみのように暗くなりおつた。そうして、いなずまがまつ白な光をはなつたと思うと、いきなり大つぶの雨がどつとふつてきおつた。大風もふきだした。

すると、今の今まで、静かに流れとつた川が、急にごおごおと音をたてて荒れくるいだしたんや。そのいきおいつてたらな、まるで、リユウが口から火をふきながら、岩をかみくだいてはいずり回つているみたいでな。

村の人んたあは、

「水神さんがおこつとる。」

「水神さんがおこりんさつた。だれやしらん水神さんの気にいらんことをしてまつた。」つて。こわい、こわいつて。頭のてつぺんまで、ぶるぶるふるつて。ひと夜さ中お祈りをしたんや。

やけど、川はおさまらん。村の人んたあの祈りを聞いてくれんで、三日三ばん荒れくるつとる。

困つてまつた村の人んたあは、とうとう、四日めの夜さ庄屋さんの家に集まつて、

「水神さんの気をとりなおしてもらうには、三井山に登つて、天の神さんにお願いするほかない。」

つて、話し合つた。

そうして、ふりしきる雨ん中を、ようけおそなえ物をもつて、三井山の頂上に登つて行きんさつた。

村の人んたあは、大きなかがり火をたいて、いつしようけんめい、天に向つてお祈りをしんさつた。

するとどうや。東の空から、ひとすじの光が、向こう岸の荒れ地をこうこうとさしだいたやないか。そうして、あたりが次第に明るくなつてきおつた。

さつきまでふつとつた雨がやんだ。
大風もふかんようになつた。
今まで荒れくるつとづた川が、まるで、うそみたいにもとの静かな流れにもどつてまつた。
村の人んたあは、
「やれやれ。ありがたいこつちや。天の神さんがわしんたあの願いをかなえておくんなさつた。」
つて。喜び合つて。村へ帰つて行つたそうや。

五日めの朝が来た。
村の人んたあは、やつとかめに、静かで平和な日をむかえることができた。
ほんでもな、ふしぎな事が起きていたんやで。
きんのう、ちようど最初の光がさした向こう岸の荒れ地に、小つさい小屋がたつとたんや。そんでな、おじいさんがひとり、くわをふりあげて、せつせと荒れ地を切り開いとる。
村の人んたあはおどろいたわね。
「あんなとこに、いつの間に小屋ができおつた。」

つて。
「畑を作つとるようやが、わしらが作ろうとしてもかなわん荒れ地にできるんやろか。」
つて。
「それにしてもふしぎなんは、あのじいさんやわ。どつからおんさつたもんか。」
つて。
だれもかれも、ふしぎやふしぎやつて。向こう岸の様子をじつと見とつたげなわ。
そのうちに、そのわけが知りたいんやな。庄屋さんが、村の代表でおじいさんに会いに行くことにしたんや。
でもよ、おじいさんは、庄屋さんが何を聞いても、なんも答えてくれへん。
「おじいさんは、どつからおんさつたな。」
「なんで、こんな荒れ地を開く気になりんさつたな。」
おじいさんは、ただにこにこ、にこにこわらつとるばつかり。
庄屋さんはしかたがないもんで、最後におじいさんの名まえを聞いた。
「甚六（じんろく）といいますだ。」
それにだけ、はつきり答えたで。
そやから、村の人んたあは、おじいさんのことを「甚六」つて名まえのほかには、だれ

も、なんも知らん。
村の子どもらはおもしろい。
日がたつにつれて、だれが作つたともなしに、おじいさんのことを歌にしてまつた。
みんなでうたつとる。

じんろくじいさんお人よし
どつからきやあつた
にいこにこ
どうやつてきやあつた
にいこにこ

甚六じいさんは、はたらき者やつた。

荒れ地に住みついてから、三日で畑を作つてまつた。七日たつたら田んぼを作つてまつた。

畑には、いもやとうもろこしや、そのほかいつぱいできおつた。秋になると、田んぼには、黄金色の米が重たそうに実りおつた。

でもよ、甚六じいさんはひとりやろ。よめさんも子どももおらんで、そんなにようけの米や野さいはとても食いきれん。そんでな、甚六じいさんは舟を作つたんや。舟に米や野さいをいつぱいのせて、村へ行つては困つとる人に分けてやつたんや。

そやから、村の人んたあは、今までみたいに食うもんに困らんようなつた。草の実を食わんでもすむようになつた。

村の人んたあは、いつの間にか、甚六じいさんのことを、

「天の神さんのお使いや。」

「天の神さんが、わしらの困つとるのをみて、助け人をさずけておくんなさつたんや。」

つて、うわさするようになつた。

子どもらはやつぱりおもしろい。歌にしつぽをつけてまつた。

じんろくじいさんお人よし
どつからきやあつた
にいこにこ
どうやつてきやあつた
にいこにこ
庄屋さんが聞いても答えやへん
お殿さんが聞いても答えやへん
わしら天の神さんのお使いやと
思つとる

月日の流れは早いもんや。

甚六じいさんが村に住みついて、数年たつてまつた。

その日は、朝からほんとにええ天気やつた。三井山の小鳥どもはそろつて、きれいに合唱しとる。川は青くすんで、中をおよぐアユのむれがよう見える。庄屋さんのこぐ舟が水面にうつつて、鏡ん中を行くようや。

「甚六じいさん、きようは相談があつて来たんやがな。ひとつ村のためにほねおつてくれ

んさらんか。」

つて、庄屋さんが言んさつた。

はたらきもんの甚六じいさんにしてはめずらしい。えんがわで、ネコのせなかをなでてやつとる。日なたぼつこをしとつたんやな。

甚六じいさんは、

「これは庄屋さん、こんなじじいにほねをおれとは、いつたい何事ですかな。」

つて、だいとつたネコをひざからおろしなさつた。

ネコは、けたるげに、大きなあくびをひとつして、ゆつくり庭におりて行きおつた。

庄屋さんは、ゆんべ、村の会合で話し合つたことを、甚六じいさんに話しんさつた。

ゆつくりとな。ぜんぶやぞ。

――― 甚六じいさんがこの村におんさつてから、食うもんに困らんですむようになつた。でもよ、いつまでたよつとるわけにいかん。それで、自分たあも甚六じいさんみたいに、荒れ地でもなんでも開こんして、困らんだけの作物がとれる田んぼや、畑を作ろうやないか。そやけど、こんな小つさい村では開こんしようにも土地もない。どうすらええかわからん。甚六じいさんにちえを借りることにしようやないか。 ―――

つてな。

甚六じいさんは、しわだらけの顔に、につこり笑(え)みをうかべてよ。

「あしたきなされ。」

つて。そう言つて、舟ん乗つてどつか出かけてまつた。

その夜さ。川はひさしぶりに、大荒れに荒れおつた。やつぱり大つぶの雨がふつて、大風がふいて、村中の雨戸をどんどんたたきおつた。

次の日や。庄屋さんや村の人んたあは、村の前を見てびつくりしてまつた。

きんのうまで、とうとうと流れとつた川が、ずうつと向こうを流れとつたからや。そして、村の前にあつた川のあとは、たがやすなら、田んぼや畑になる、ひろい土地に変わつとつた。

ところがよ、甚六じいさんのすがたはどつこにも見えん。村の人んたあは、みんなで手分けしてさがした。けど、どつこにもおらん。だれもよう見つけなんだ。

村の人んたあは、

「やつぱり、神さんのお使いやつた。」

つて、言つてな、甚六じいさんの開いた土地を大事にまもつた。そして、甚六じいさんの住んどつた小屋のあたりを、「甚六屋敷」つてよぶようにしたんやと。

文・中村勝行

挿絵・柳　勇

甚六屋敷

各務原市山脇町

羽島用水に甚六橋とよばれる小さな橋がかかっています。

その橋のたもとに広がっている集落が「甚六屋敷」です。

現在では、東甚六、西甚六と分けてよばれているほど大きな村になっています。つい近年までは、戸数もまばらで甚六屋敷とまとめてよばれていたそうです。

各務原市立図書館蔵書

発　行　各務原市国語同好会
発行日　昭和五十二年四月一日
出版社　カヨウ出版
岐阜県羽島市江吉良五一七

名古屋市市民図書館
113705461